

岐阜県立岐阜本巣特別支援学校

校長 織田 龍美

学校住所 岐阜市西秋沢 2-363-1 電話 058-239-9712

1 会の名称 岐阜本巣特別支援学校学校評議員会（学校関係者評価委員会）

2 会の構成 委員 高橋 武夫 もとす広域連合 療育医療施設幼児療育センター長  
筑間 敦子 地域ボランティア、本巣小学校茶道講師  
早川 忠利 西秋沢地区自治会長  
松尾 綾子 本巣市本巣民生児童委員  
真野 賢児 社会福祉法人あしたの会 どんぐり村福祉工場長  
(委員名は五十音順)

学校側 白井 美江子 P T A会長  
林 真頼 P T A副会長  
関谷 美和 P T A副会長  
織田 龍美 校長  
高木 裕之 事務長  
青木 咲子 教頭  
林 亨 小学部主事  
坂口 浩之 中学部主事  
児玉 芳廣 高等部主事  
山内 明志 教務主任  
大前 裕子 支援センター長

3 会の目的 学校運営等について地域住民や保護者等から幅広く意見を求め、充実した教育活動を展開するとともに、地域に開かれた学校づくりを推進することを目的とする。

4 会の開催 平成22年2月16日（火）午後1時～3時 岐阜本巣特別支援学校セミナーハウス  
委員5人と学校側11人が出席（今回は自己評価のためP T A副会長が出席）

5 会の概要

- (1) 校長挨拶
- (2) 学校祭（12月4日・5日実施）の様子紹介
- (3) 全体会議

作業製品の価格について

学校側 印刷紙工班にジャンパーにロゴ印刷と、軍手に社名印刷の発注があった。これまでの一定工賃でなく、市場価格に合わせて受注したい。

意見1 継続的に仕事があるとよい。

意見2 価格案については異議なし。

学校側 本日価格審査していただいた他に今後注文を受ける作業製品については、市場価格等を参考に主事会で価格を決めさせていただきたい。

自己評価について説明（校長）

質疑応答

- 意見1 職場開拓の120社は就業体験の受け入れを承諾した会社か。  
学校側 120社は就業体験の受け入れを依頼するために当校教員が訪問した企業数である。
- 意見2 実際に就業体験した企業数は何社か。  
学校側 40数人の生徒が就業体験をしているが、2回実施しており、2倍程度の企業数である。受け入れ可能という回答をもらえるのは訪問先の半数以下であるが、就労はともかく就業体験は可能という企業は増えている。いまはまず当校の名前を知ってもらう段階と考える。就労先としては児童生徒の居住する市町を開拓したい。
- 意見3 企業が障がい者を雇用した場合の助成があると思うが、どのような状況か。  
学校側 職場適応訓練制度、特定求職者雇用開発助成金などいろいろな制度がある。職安との連携が重要である。
- 意見4 助成期間だけ受け入れるというような制度の悪用がないか、職安の役割は大事だ。  
学校側 ハローワークなどとの関係作りを行ってきたが、各市町の自立支援連携協議会との連携も大事である。また、同じ仕事のみでの繰り返しではなく、多様な仕事にも適応して働ける力をつけることも重要。飛騨特別支援学校で行っているデュアルシステムという、授業時間を利用した就労の機会は、そうした力をつけるためのよい方法として認識されつつある。当校の場合、WSBバイオとの連携に対し、無菌培養に取り組めるよう岐阜県が予算を付けている。
- 意見5 職場開拓に保護者はどうかかわっているか。就業体験をする会社を親が見つけてくるように指導をする学校もあるようだが。  
学校側 当校から就業体験先を保護者に紹介する一方で、保護者からも新たな情報を提供してもらえるような情報交換を図りたいと考えている。就業体験については保護者向け説明会を3、4回開催している。実際問題として本人が通える企業を探すことが大事であり、地元で就業体験や就労先を探すには保護者の協力が必要である。将来を見据え、就労先に毎日通勤できるように、生徒が自力通学で体と心を鍛えていくことも重要と考える。
- 意見6 個別の教育支援計画について、療育センターから当校へ進んだ子どもの状況を今後の参考として知りたいが、情報提供は可能か。  
学校側 子どもの情報提供については検討させてもらいたい、前提として親の許可が必要となる。地域の支援センターとしての機能が生かせるように相談していきたい。
- 意見7 療育センターでは人材募集も大きな課題である。人材の情報があればお願いしたい。
- 意見8 卒業後の介護施設入所等で継続して取り組めることがあればやっていきたいので、支援計画等の情報があるとよい。  
学校側 将来を見据えた移行支援計画は保護者に渡している。保護者の許可があれば情報共有は可能。
- 意見9 卒業生は何人か。  
学校側 今年度は4人。来年度は3学年が揃い、卒業生も多い。
- 意見10 在学中はよい環境が保証されていても、親としては卒業後どうなるかが心配だと思う。障がい者に対する社会の理解が広がることを期待したい。
- 意見11 作業製品を発注してくれたのはどういう会社か。  
学校側 作業服の関係の業者である。継続して仕事が入るとよい。別の作業班では、環境衛生班が西秋沢の公民館の清掃に行かせてもらった。前回の学校評議員会での提言を受けて早速動くことができた。個人宅の清掃にも行っている。校内の活動だけでなく、外で活動して外の方から声をかけてもらう経験が重要と考える。
- 意見12 外部の方から「ありがとう」の一言をかけてもらうことが、仕事のモチベーションを高める上で何より大切なことである。
- 意見13 個別の教育支援計画について、学校卒業後、次の施設で生かせるように、関係者が連携し一堂に会して作成してほしい。  
学校側 理学療法士、作業療法士に学校に来てもらったり、教員が訓練を参観したりして連携をとっている。同じテーブルについて話し合うことはまだむずかしいが、個別のケース会議についても模索しているところである。
- 意見14 高等部の作業班がたくさんあるのに、中学部の作業班が2つしかない。高等部へつなげていけるように6年のスパンで取り組んでほしい。  
学校側 中学部の段階では、繰り返しの作業を通じて心構えや技術の基本的なところを形成して

いきたいと考える。生徒数、教員数の規模から見て、作業班を増やすことは容易でない。高等部の作業を見学する機会を設け、連携を図っている。

意見15 特別支援学校の児童生徒の保護者は卒業後の進路は親が見つけてくるものと思っているが、特別支援学級から特別支援学校に入った児童生徒の保護者は進路先は学校が探してくれるものと思っているところがある。きびしい状況であることを学校から保護者に伝え、意識改革をしないとイケないのではないか。現実問題として、親が直接動くほうが進路先を見つける上では強いと思う。

学校側 学校と保護者が情報提供し合い、協力することが大切である。

意見16 小学部では療法士との連携はどうなっているか。

学校側 療法士との連携は、児童全員について行っているわけではなく、必要性の高い児童から行っている。保護者の期待する支援の中身について、年4回の個別懇談等を活用してしっかり話し合っていきたい。なお、療育センター等の機関や学校間で療法についての個人情報勝手に提供し合っているかのように誤解される向きがあるので、情報提供は必ず保護者の了解を取ってから行うものであることを念を押しておきたい。

#### (4) ご提言

意見1 来年度、高等部は入学時からの3学年が揃うことになるが、卒業後の進路決定が重要である。大勢卒業する最初の年度となるので、しっかり取り組んでほしい。

意見2 障がい児にとって特別支援学校以外の選択肢はどうなっているか。

学校側 通常の小学校・中学校に特別支援学級がある。

意見3 小中学校へ行く人と特別支援学校へ行く人の区分をどうやって付けているか。

学校側 どの学校がいちばんその児童生徒に適しているか、市町の教育委員会主催の就学相談会を行い、保護者の希望も入れて判定を行っている。就学指導委員会に当校支援センターからも参加している。

意見4 卒業後の進路が中心課題であると思う。本人や保護者の希望に沿えるよう、諸機関と連携してほしい。高等部の作業班が6つあるが、新しい分野があれば積極的に取り入れてほしい。作業班を途中で変更したい場合はどうしているか。

学校側 従来は1年次の作業班と違う作業班を2・3年次に継続していたが、新しいさまざまなものを取り入れながらやっているとところなので、作業班については毎年希望調査を行って決定していく予定である。希望の少ない作業班でも、活動を通じてモチベーションが上がっている例が見られる。技術を身につけることも大事だが、働く意欲をしっかり身につけさせたい。

意見5 子どものことで悩んでいる保護者に、支援センターの利用を勧めていきたい。本年度同様、あじさいプロジェクトに協力したい。卒業後の進路先として選ばれる事業所をつくりたい。

意見6 今回、卒業後の話が中心になっているが、学校の中での毎日の生活が楽しく充実していることがいちばん大切である。子どもたちが毎日充実し満足できるようなかかわりに努めてほしい。

意見7 最初、知肢病の総合型ということで、子どもの入学時には不安があったが、子どもたちが自然な姿でそこにいる様子を見て安心している。そのまま見守ることで子どもの力を伸ばしていきたい。将来を考えると、スキルよりも生活の基礎習慣が身に付いているかどうか大切と言われる。当校のやり方で進んでもらえばよいと思う。

意見8 一般就労者が孤立したり悩みを相談できないでいることがあると聞く。卒業後も悩みや不安を相談できる窓口を設けてもらえるとよい。

意見9 中学部から作業学習が始まるが、小学部でも少しずつ作業学習に取り組む機会を増やしてもらえるとよい。

学校側 本日は貴重なご意見をたくさんいただいた。情報を集め、実績をつくることを重点に、3年目を迎えたい。